

アクティブシニアのボランティア活動参加と社会関係資本：
福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から4

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚本, 利幸, 舟木, 紳介, 橋本, 直子, 永井, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	https://fpu.repo.nii.ac.jp/records/258

[研究論文]

アクティブシニアのボランティア活動参加と社会関係資本
— 福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から 4 —

塚本 利幸・舟木 紳介・橋本 直子・永井 裕子

1. はじめに

社会関係資本 (Social capital) の考え方が注目を集めている。社会関係資本の定義は一様ではなく、論者によって強調されるポイントは異なるが、個人や企業などの間の具体的なネットワーク、互酬性などの規範、信頼によって定義されることが多い。社会問題への対処に関して、社会関係資本が充実していれば、地域住民が互いに協力し合うことが容易になると期待されている。ボランティア活動を促進するためには、個人間の対面的なネットワークを核として形成される住民相互の信頼関係や互酬性といったミクロレベルでの社会関係資本を充実させておくことが重要であると予想される。その一方で、個票レベルのデータ分析を通して、ボランティア活動参加と個人レベルでの社会関係資本の結びつきを具体的に検証した研究は、ほとんど見られない。

本稿では、健康で活動的な高齢者 (アクティブシニア) のボランティア活動への参加経験、参加希望と、地域社会のネットワークへの包摂の程度、近隣などとの互酬関係、他者に対する信頼、などとの結びつきについて、アンケート調査のデータを用いて検証する¹⁾。

2. アンケート調査の概要と研究方法

福井県はボランティア活動が盛んで、「平成18年社会生活基本調査」によれば、福井県の行動者率 (過去1年間に何らかの「ボランティア活動」を行ったものが10歳以上人口に占める割合) は33.6%で、全国平均の26.2%を大幅に上回り、全国第4位となっている。

福井県立大学ボランティア研究会では、高齢者のボランティア活動参加の実態を明らかにする目的で、60歳から80歳までの福井県在住の一般住民から無作

表1 回答者の基本属性

項目	カテゴリー	%
性別 (n=936)	男性	49.9
	女性	50.1
年齢 (n=937)	60～64歳	30.2
	65～69歳	25.3
	70～74歳	20.7
	75～80歳	23.8

受付日 2017.5.1
受理日 2017.5.1
所 属 看護福祉学部

為抽出した2000人を対象に「ボランティア・市民活動（NPO など）に関するアンケート」を郵送法で、2013年6月に実施した²⁾。有効回収数は949件（回収率47.5%）であった。回答者の基本属性（性別と年代）は表1の通りである³⁾。

この調査データを、統計的な手法（クロス集計とカイ2乗検定、順位相関係数、因子分析、クラスター分析など）を用いて、分析する。

3. 倫理的配慮

アンケート調査の実施にあたっては、インフォームド・コンセントに留意するとともに、無記名式でおこなった。分析および分析結果の公表に際しては、全体として集計し、統計的手法を用いた処理をおこない、個人の回答内容が特定されることのない手法を採用する。

4. 分析結果

（1）地域社会におけるネットワークとの関係

地域社会とのつながりが緊密であるほど、ボランティア活動への参加も積極的であることが予想される。1）自治会（町内会）行事への参加の程度、2）公民館活動への参加の程度、3）地域の団体やグループ・サークルへの加入状況、4）近隣交際の程度が、ボランティア活動への参加経験、今後の参加の意向にどのように影響しているかを検証する。

1）自治会（町内会）の行事への参加の程度との関係

自治会（町内会）の行事への参加の程度とボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係についてまとめたものが図1-1、図1-2である。自治会（町内会）の行事への参加頻度が高いものほど、ボランティア活動への参加経験が豊富であり、今後の参加を希望するものの割合も高いことが確認できる（いずれも1%水準で有意）。

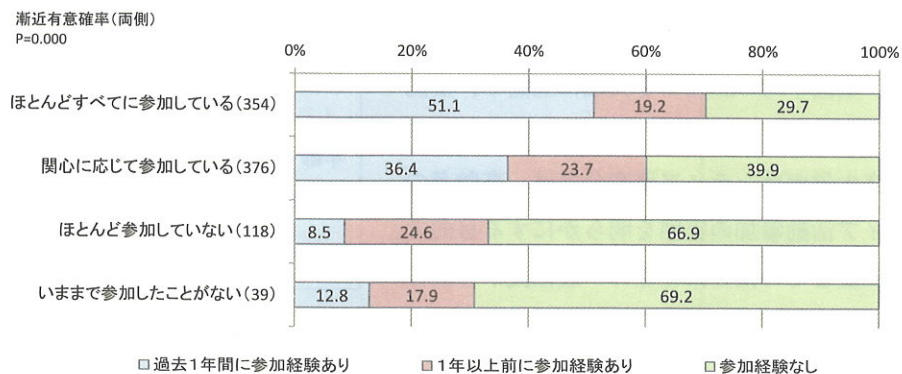


図1-1 自治会（町内会）行事への参加頻度×ボランティア活動への参加経験

アクティブシニアのボランティア活動参加と社会関係資本

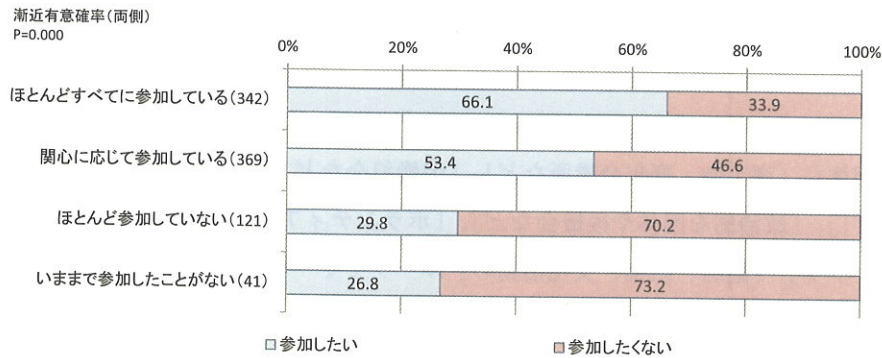


図 1-2 自治会(町内会)行事への参加頻度×ボランティア活動への参加の意向

2) 公民館活動への参加の程度との関係

公民館活動への参加の程度とボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係についてまとめたものが図 2-1、図 2-2 である。公民館活動への参加の程度が高いものほど、ボランティア活動への参加経験が豊富であり、今後の参加を希望するものの割合も高いことが確認できる(いずれも 1%水準で有意)。

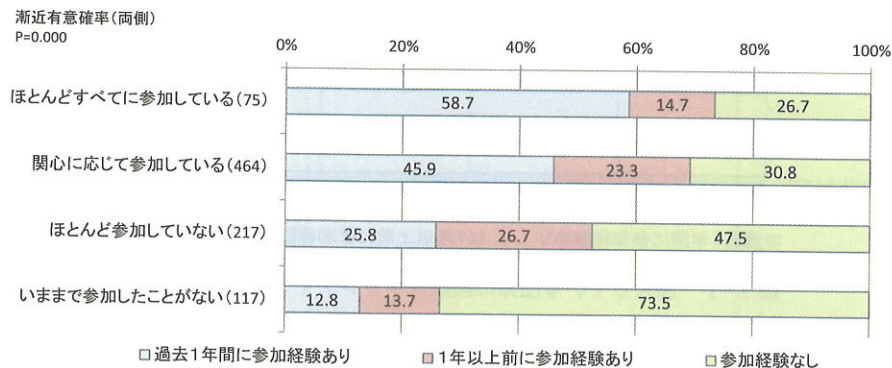


図 2-1 公民館活動への参加頻度×ボランティア活動への参加経験

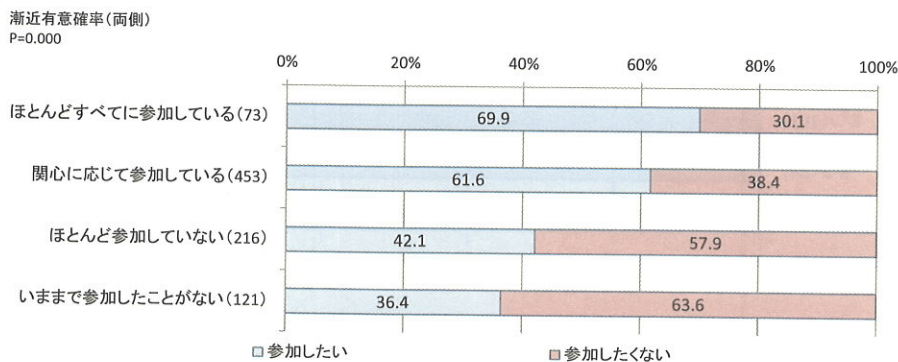


図 2-2 公民館活動への参加頻度×ボランティア活動への参加の意向

3) 地域の団体やグループ・サークルへの加入状況との関係

今回の調査では、「各種の女性団体（婦人会など）」、「壮年会」、「老人会・老人クラブなど」、「青年会、青年団など」、「PTA、子ども会など」、「消防団、防災団体など」、「農業組合などの農事関連団体」、「商工会、青年会議所など」、「労働組合など」、「宗教的な団体（氏子会、檀家会、講など）」、「政治的な団体や後援会など」、「ボランティア団体、NPO など」、「スポーツのチームやクラブ」、「趣味、娯楽、文化活動のグループやサークル」、「その他の団体」への加入について尋ねている。

加入している団体の種類とボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係についてまとめたものが図3-1、図3-2である。加入している団体の種類が多いものほど、ボランティア活動への参加経験が豊富であり、今後の参加を希望するものの割合も高いことが確認できる（いずれも1%水準で有意）。

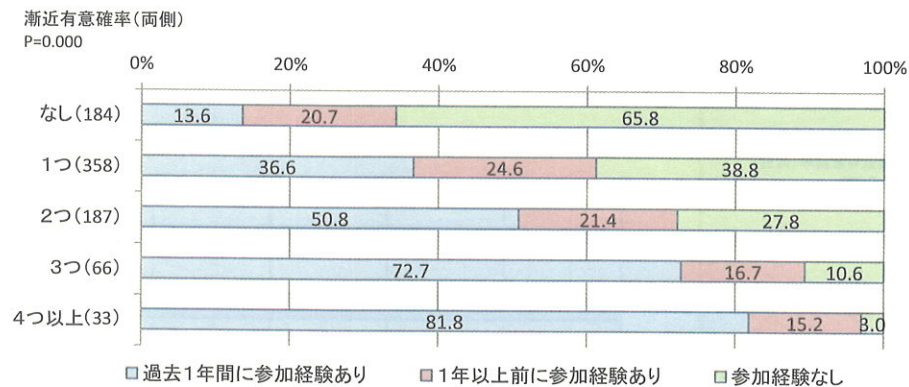


図3-1 加入している団体の種類×ボランティア活動の参加経験

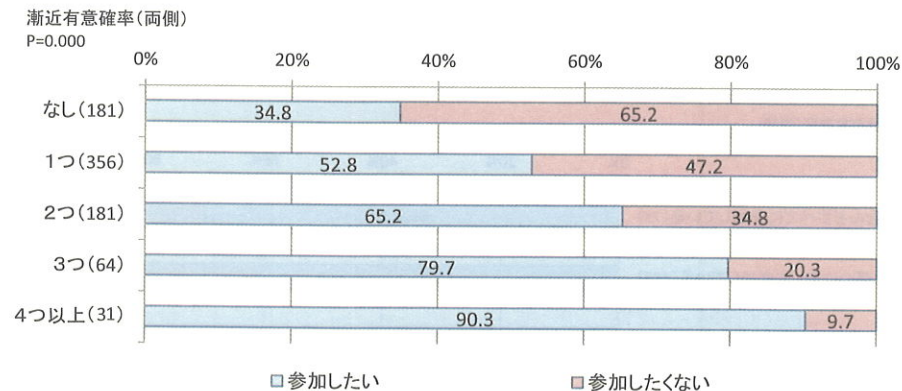


図3-2 加入している団体の種類×ボランティア活動への参加の意向

4) 近所付き合いの程度との関係

今回の調査では、近所付き合いの程度について、「相談事をするくらい親しくしている」、「よく世間話をする」、「たまに立ち話をする」、「あいさつをするだけ」、「ほとんど付き合っていない」の5段階で尋ねている。

近所付き合いの程度とボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係についてまとめたものが図4-1、図4-2である。近所付き合いの程度が緊密なものほど、ボランティア活動への参加経験が豊富であり、今後の参加を希望するものの割合も高いことが確認できる（いずれも1%水準で有意）。

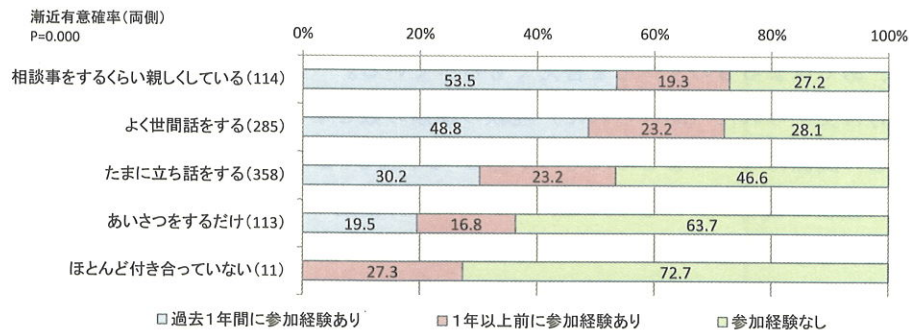


図4-1 近所付き合いの程度×ボランティア活動の参加経験

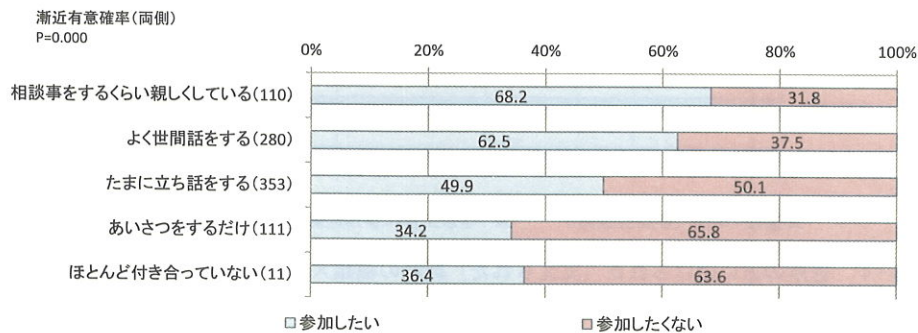


図4-2 近所付き合いの程度×ボランティア活動への参加の意向

(2) 近隣などとの互酬関係との関係

助けてもらった、助け返すといった、贈与に反対贈与で報いる関係のことを互酬関係と呼ぶ。助け合いに関する規範（互酬性の規範）は、特定のメンバー間での顔の見えるやりとりのような閉じた関係で機能する「特定化互酬性」と、情けは人のためならずといったロジックにもとづき、不特定多数の他者を対象とする開かれた関係で機能する「一般的互酬性」に大別される。

互酬性の規範が強く働けば、ボランティア活動への参加が活性化されることが予想される。

今回の調査では、1) 近所の方に支えられた(助けられた)経験、2) 自分や家族の日常生活が不自由になったときに近所の方にしてほしいこと、3) 近所の困っている世帯にしたい手伝いの程度、4) 最近1年間に自宅に招いた人の種類について尋ねている。これらの要因が、ボランティア活動への参加経験、参加の意向にどのように影響しているかを分析する。

1) 近所の方に支えられた(助けられた)経験との関係

今回の調査では、近所の方に支えられた(助けられた)経験について、「話し相手や相談相手」、「安否確認の声かけ」、「子どもの一時預かり」、「通院の送迎や外出の手助け」、「除雪の手伝い」、「買い物やゴミ出しの手伝い」、「食事のしたくや後かたづけの手伝い」、「掃除や洗濯の手伝い」、「冠婚葬祭の手伝い」、「具合が良くないときの病院などへの連絡」、「その他」の11項目で尋ね、あてはまるものすべてを答えてもらっている。

近所の方に支えられた(助けられた)経験の種類の数とボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係についてまとめたものが図5-1、図5-2である。近所の方に支えられた(助けられた)経験の種類が多いものほど、ボランティア活動への参加経験が豊富であり、今後の参加を希望するものの割合も高いことが確認できる(いずれも1%水準で有意)。

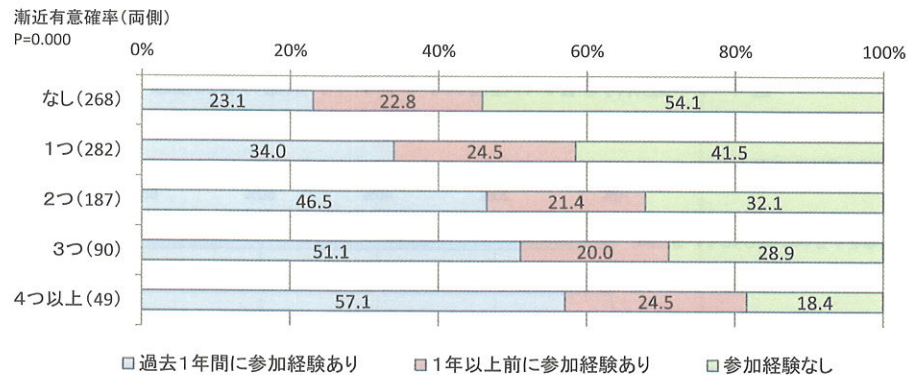


図5-1 近所の方に助けられた(支えられた)経験の種類×ボランティア活動への参加経験

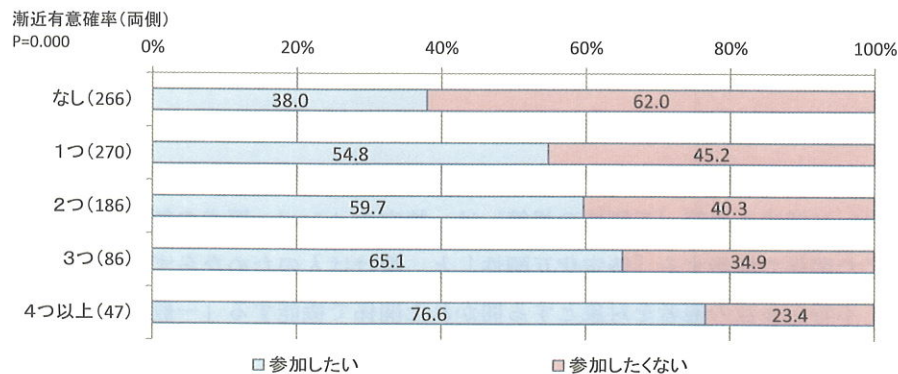


図5-2 近所の方に助けられた(支えられた)経験の種類×ボランティア活動への参加の意向

2) 近所の方にしてほしいこととの関係

今回の調査では、自分や家族の日常生活が不自由になったときに近所の方にしてほしいことについて、近所の方に支えられた（助けられた）経験と同様の11項目で尋ね、あてはまるものすべてを答えてもらっている。

自分や家族の日常生活が不自由になったときに近所の方にしてほしいことの種類の数とボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係についてまとめたものが図6-1、図6-2である。自分や家族の日常生活が不自由になったときに近所の方にしてほしいことの種類が多いものほど、ボランティア活動への参加経験が豊富であり、今後の参加を希望するものの割合も高いことが確認できる（いずれも1%水準で有意）。

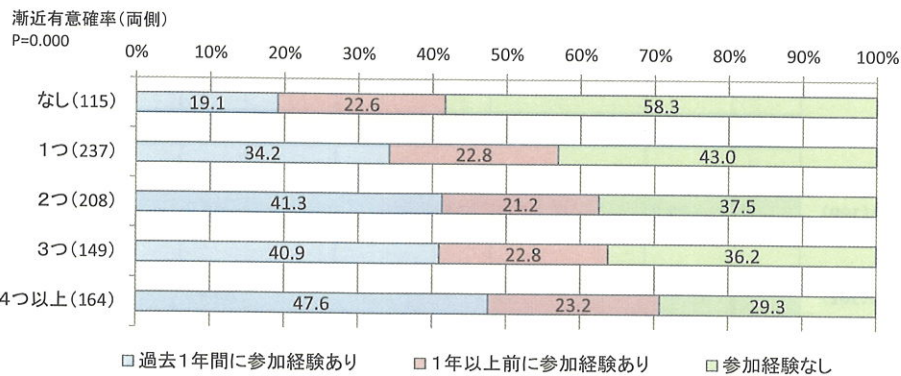


図6-1 日常生活が不自由になったときに近所の方にしてほしいことの種類×ボランティア活動への参加経験

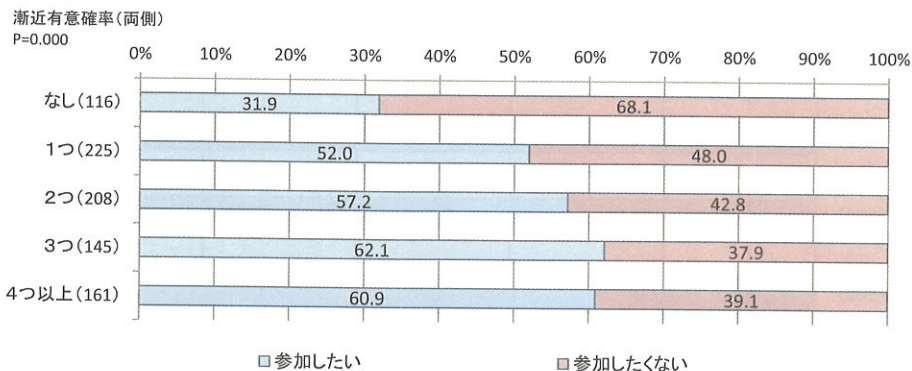


図6-2 日常生活が不自由になったときに近所の方にしてほしいことの種類×ボランティア活動への参加の意向

3) 近所の困っている世帯にしたい手伝いの程度との関係

今回の調査では、近所に高齢化や子育てなどにもなう困りごとを抱えている世帯があった場合、どの程度の手伝いをするのかを、「積極的に手伝いをする」、「できる範囲で手伝いをする」、「ある程度の手伝いをする」、「少しくらいなら手伝いをする」、「緊急性の高い場合だけ手伝いをする」、「手伝わない」の6段階で尋ねている。

手伝いの程度を、高、中、低の3段階にまとめなおしたものとボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係についてまとめたものが図7-1、図7-2である。したい手伝いの程度が高いものほど、ボランティア活動への参加経験が豊富であり、今後の参加を希望するものの割合も高いことが確認できる（いずれも1%水準で有意）。

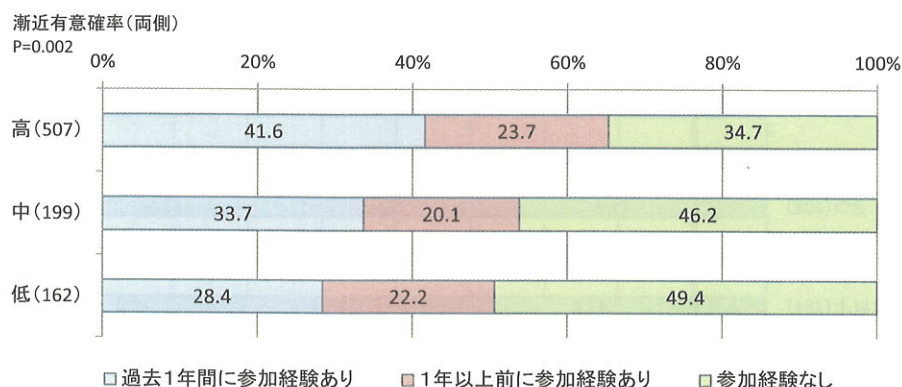


図7-1 近所の困っている世帯にしたい手伝いの程度×ボランティア活動への参加経験

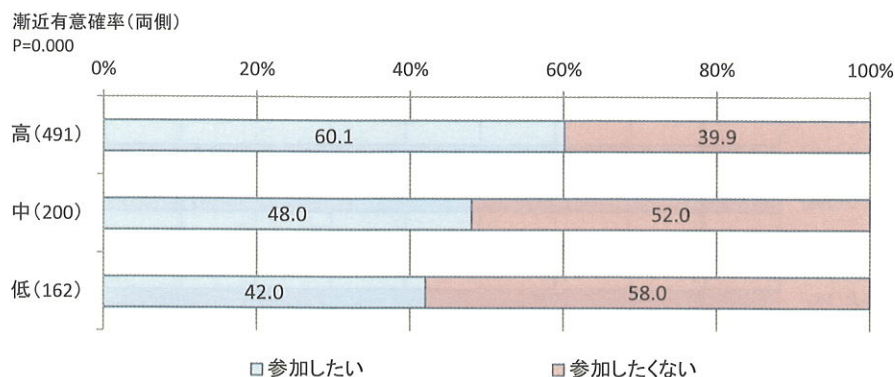


図7-2 近所の困っている世帯にしたい手伝いの程度×ボランティア活動への参加の意向

4) 最近1年間に自宅に招いたことのある人の種類との関係

今回の調査では、最近1年間に自宅に招いたことのある人について、「親せきの人」、「職場や仕事関係の人」、「通っている学校の友人や先生など」、「同じサークルや団体に加入している人」、「学生時代の友人」、「近所の人」、「その他の友人や知人」、「その他の人」の8項目で尋ね、あてはまるものをすべて答えてもらっている。

最近1年間に自宅に招いたことのある人の種類の数とボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係についてまとめたものが図8-1、図8-2である。招いた人の種類が多いものほど、ボランティア活動への参加経験が豊富であり、今後の参加を希望するものの割合も高いことが確認できる（いずれも1%水準で有意）。

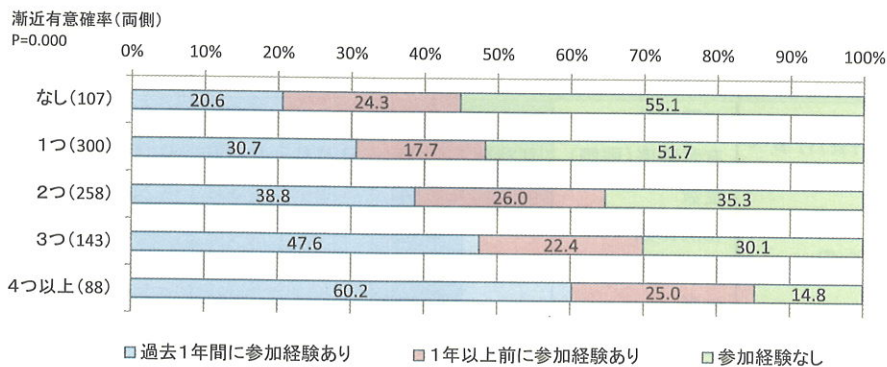


図8-1 最近1年間に自宅に招いた人の種類×ボランティア活動への参加経験

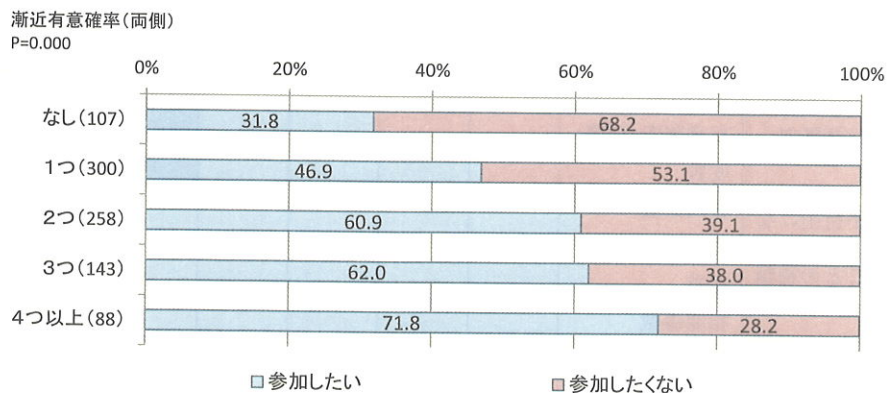


図8-2 最近1年間に自宅に招いた人の種類×ボランティア活動への参加の意向

(3) ネットワーク、互酬性とボランティア参加に関する多変量分析

地域社会とのネットワーク、近隣などとの互酬関係、ならびに、ボランティア活動への参加経験、参加希望の結びつきについて、多変量分析の手法を使って検討してく。

1) 地域社会とのネットワーク、近隣などとの互酬関係の相関分析

ここまで概観してきた質問項目について、要素間の結びつきを確認する。表2は、それぞれの要素の間の相関関係をまとめたものである。相関係数として、spearman の順位相関係数を算出してある。

表2 変数間の相関関係

		公民館活動参加	参加団体の種類	近所付き合いの程度	支えられた経験の種類	近所の方にしてほしいこと	困っている世帯への手伝い	1年間に自宅に招いた人の種類
自治会(町内会)行事への参加の程度	相関係数	0.442	0.343	0.341	0.238	0.206	0.170	0.182
	有意確率(両側)	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	度数	895	841	897	883	880	880	906
公民館活動への参加の程度	相関係数		0.422	0.349	0.218	0.199	0.170	0.232
	有意確率(両側)		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	度数		836	884	867	867	866	892
参加している団体、グループ・サークルの種類	相関係数			0.356	0.259	0.226	0.215	0.366
	有意確率(両側)			0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	度数			837	821	826	822	846
近所付き合いの程度	相関係数				0.343	0.257	0.258	0.318
	有意確率(両側)				0.000	0.000	0.000	0.000
	度数				879	874	876	898
近所の方に支えられた(助けられた)経験の種類	相関係数					0.455	0.169	0.301
	有意確率(両側)					0.000	0.000	0.000
	度数					870	864	893
日常生活が不自由になったときに近所の方にしてほしいことの種類	相関係数						0.247	0.244
	有意確率(両側)						0.000	0.000
	度数						865	891
近所の困っている世帯にしたい手伝いの程度	相関係数							0.253
	有意確率(両側)							0.000
	度数							889

すべての変数間に1%水準で有意な正の相関がみられる。これは下記に例示するような関係が存在していることを意味する。「地域の行事への参加の程度が高いものほど、公民館活動への参加の程度も高い」、「近所の方に支えられた(助けられた)経験の種類が多いものほど、近

所の困っている世帯にしたいと考える手助けの程度が高い」、「近所付き合いの程度が高いものほど、自分や家族の日常生活が不自由になったときに近所の方にしてほしいことの種類が多い」など、である。

相関関係の分析の結果からは、1) 地域社会の特定のネットワークと緊密なつながりを持っているものは、何重ものネットワークに包摂されている可能性が高いこと、2) 一方的な贈与－被贈与関係ではなく、双方向的な互酬関係が成立しており、地域社会で互酬性の規範が機能していること、が確認できる。

2) 地域社会とのネットワーク、近隣などとの互酬関係の因子分析

質問項目をより少数の因子に縮約するために因子分析をおこない、その結果をまとめたものが表3である。

表3 地域社会とのネットワーク、近隣などとの互酬関係の因子分析

項 目	因子負荷量	
	因子1	因子2
	ネットワーク因子	特定化互酬性因子
自治会（町内会）行事への参加の程度	0.654	－0.029
公民館活動への参加の程度	0.745	－0.087
加入している団体の種類	0.494	0.123
近所付き合いの程度	0.366	0.290
近所の方に支えられた（助けられた）経験の種類	0.006	0.686
不自由になったときに近所の方にして欲しいことの種類	－0.100	0.705
近所の困っている世帯への手伝いの程度	0.173	0.269
自宅に招いた人の種類	0.225	0.334
累積寄与率（％）	37.833	50.914

注1) 因子抽出法：最尤法

注2) 回転法：プロマックス法

因子1は、「自治会（町内会）行事への参加の程度」、「公民館活動への参加の程度」、「加入している団体の種類」、「近所付き合いの程度」の4項目と正の大きな相関を示し、地域社会におけるネットワークへの包摂の度をあらわしていると解釈できる。

因子2は、「近所の方に支えられた（助けられた）経験の種類」、「不自由になったときに近所の方にしてほしいことの種類」、「近所の困っている世帯への手伝いの程度」、「自宅に招いた人の種類」の4項目と正の大きな相関を示し、閉じられた顔の見える関係における互酬性である特定化互酬性がどの程度機能しているかをあらわしていると解釈できる。

2つの因子の間の相関を確認したものが表4である。相関係数として spearman の順位相関係数を算出してある。

表4 因子間の相関係数

		因子2 特定化互酬性因子
因子1	相関係数	0.753
ネットワーク因子	有意確率（両側）	0.000
	度数	742

0.753と非常に大きな相関関係が確認できる（1％水準で有意）。地域社会のネットワークにしっかりと包摂されているものの間では、助けられれば助け返すといった互酬性の規範が有効に機能していることがみてとれる。

3）因子分析の結果を用いたクラスター分析

2つの因子の得点を用いて、クラスター分析（Ward 法）をおこない、回答者を4つのクラスターに区分した。クラスターごとに2因子の平均得点を算出し、偏差値についてまとめたものが図9である。

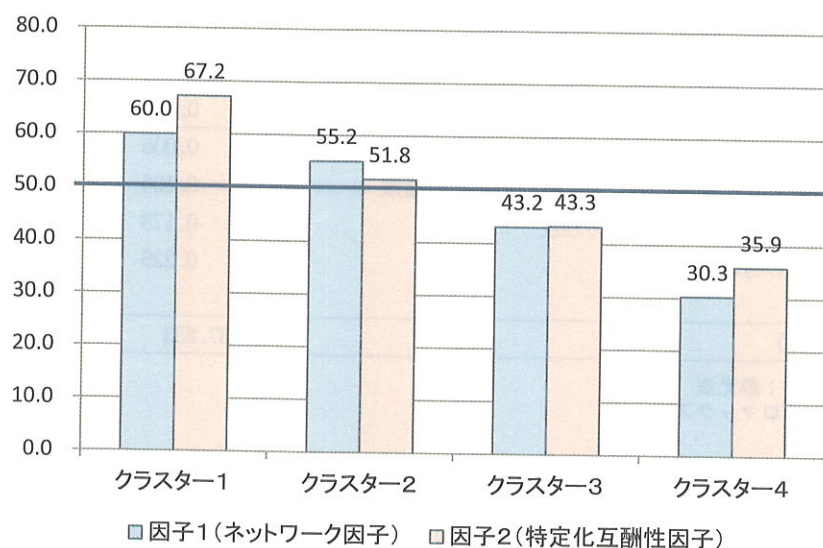


図9 クラスターごとの因子得点の偏差値

クラスター1は、ネットワーク因子ならびに特定化互酬性因子の得点がいずれも平均値を大きく上回る。クラスター2はネットワーク因子ならびに特定化互酬性の得点が平均値をやや上回る。クラスター3はネットワーク因子ならびに特定化互酬性の得点が平均値を下回る。クラ

スター4はネットワーク因子ならびに特定化互酬性の得点が平均値を著しく下回る。

クラスターごとのボランティア活動への参加経験、参加の意向についてまとめたものが図10-1、図10-2である。全般的な状況との比較のために、全体の分布も示してある。参加経験者、参加希望者の割合とも、2つの因子得点が平均を上回るクラスター1、クラスター2で高く、ネットワーク因子、特定化互酬性因子の得点が高いほど、参加経験が豊富であり、参加意欲も旺盛であることがわかる。

一方、2つの因子得点が平均を下回るクラスター3、クラスター4では、参加経験者、参加希望者の割合がともに低く、ネットワーク因子、特定化互酬性因子の得点が低いほど、参加経験が乏しく、参加意欲も低調であることがわかる。

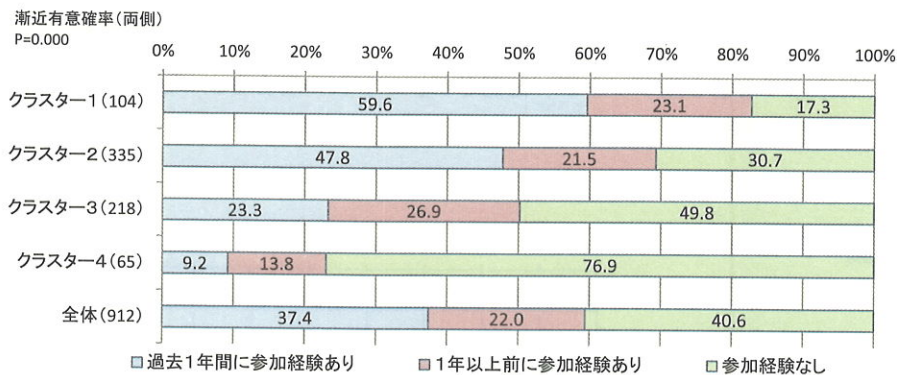


図10-1 クラスター分析（ネットワーク・特定化互酬性）×ボランティア活動への参加経験

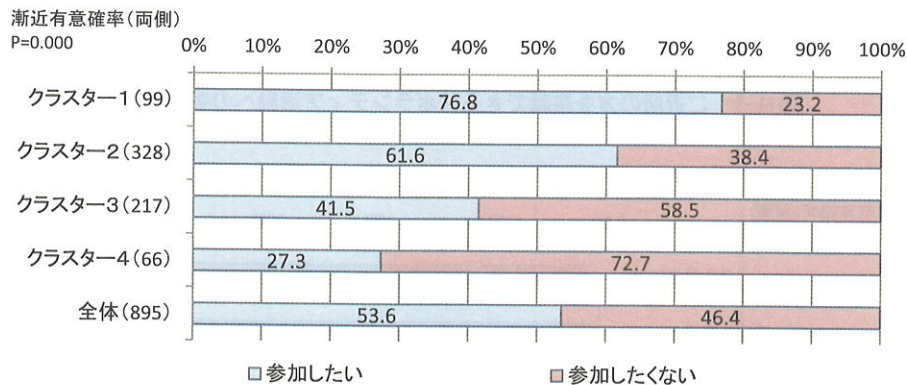


図10-2 クラスター（ネットワーク・特定化互酬性）×ボランティア活動への参加の意向

（4）他者に対する信頼との関係

社会関係資本の構成要素である他者に対する信頼とボランティア活動への参加経験、参加希望との関係について検討していく。他者に対する信頼は、家族や親戚、友人・知人、近隣の住

民、同じエスニックグループのメンバーといったよく知っている他者への信頼である特定化信頼と、不特定多数のよく知らない他者への信頼である一般的信頼に大別される。互酬性との関係では、ボランティア活動のような不特定多数の他者への支援を含む一般的互酬性は、一般的信頼との結びつきが強いと考えられている。

今回の調査では、信頼に関する7つの質問を行い、「そう思う」から「そう思わない」までの4段階から1つを選んで回答してもらっている。それぞれの質問項目への回答と、ボランティア活動への参加経験、参加希望の関係についてみていく。

1) ご近所の方を信頼できるか？

質問への回答と、ボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係をまとめたものが、図11-1、図11-2である。参加経験との結びつきに関しては10%水準の有意傾向が、参加希望との間には1%水準で有意な結びつきが、確認され、いずれの場合も、ご近所の方を信頼しているほど、参加経験が豊富で、参加意欲も旺盛である。

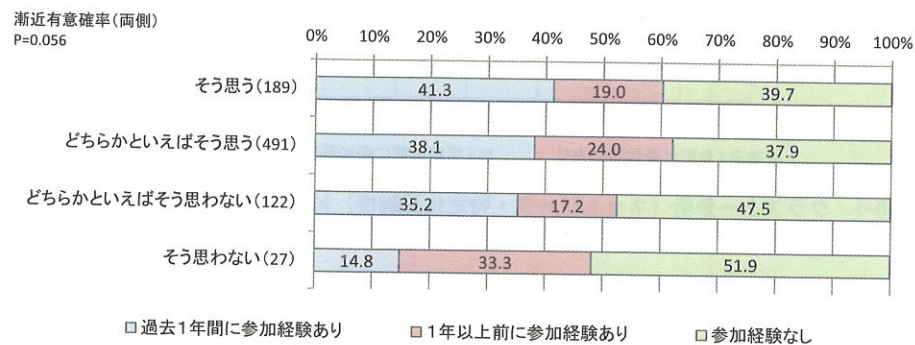


図11-1 ご近所の方を信頼できる×ボランティア活動への参加経験

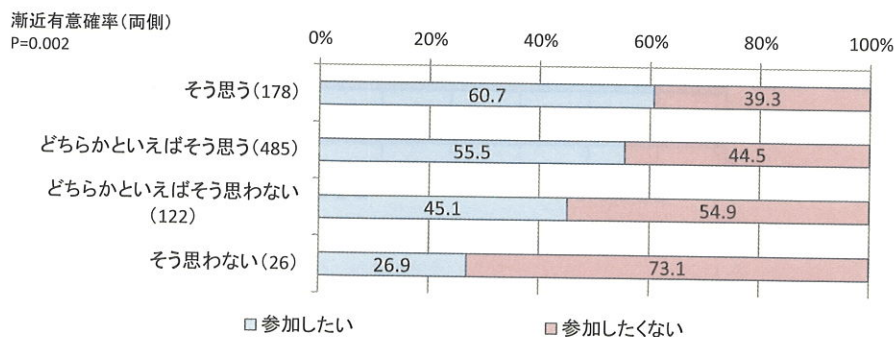


図11-2 ご近所の方を信頼できる×ボランティア活動への参加の意向

2) お住まいの地域の人たちを信頼できるか？

質問への回答と、ボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係をまとめたものが、図12-1、図12-2である。参加経験との間には5%水準で、参加希望との間には1%水準で、有意な結びつきが確認される。

いずれの場合も、「そう思わない」と回答したもので、極端に過去1年間の参加経験、今後の参加希望が乏しくなっている。一方、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」という回答の間には極端な違いが認められず、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の間では、「どちらかといえばそう思う」と回答したもので、わずかなではあるが、過去1年間の参加経験や今後の参加希望を有するものの割合が高い。「そう思う」傾向が強いほど、参加経験者、参加希望者の割合が通増する、といった単純な線形関係にはなっていない。

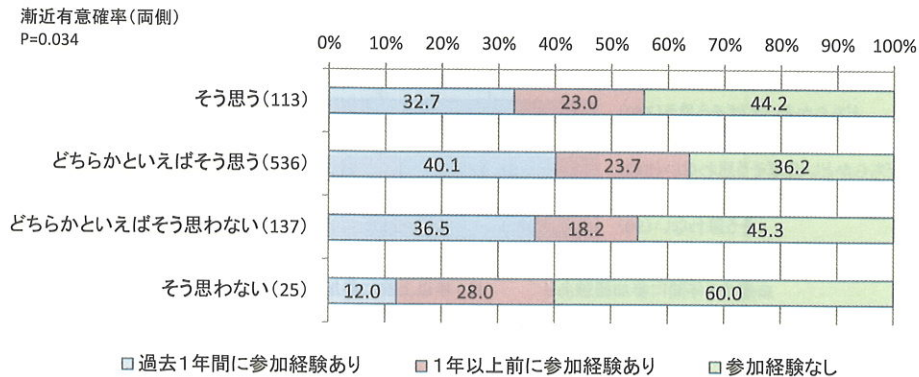


図12-1 お住まいの地域の人たちを信頼できる×ボランティア活動への参加経験

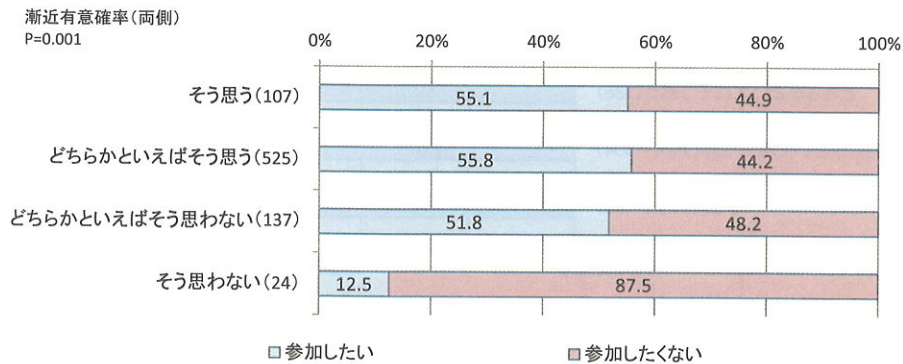


図12-2 お住まいの地域の人たちを信頼できる×ボランティア活動への参加の意向

3) ほとんどの人は信頼できるか？

質問への回答と、ボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係をまとめたものが、図13-1、図13-2である。参加経験との間には、有意な結びつきは確認できない。一方、参加の意向との間には1%水準で、有意な結びつきが確認される。

参加の意向に関して、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」の3つの回答の間には、信頼の程度が低くなるにつれて、今後の参加希望も逡減していくといった線型的な関係性が確認できる。しかしながら、最も信頼の程度が高い「そう思う」という回答を選択したもので、今後のボランティア活動参加を希望するものの割合は、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」という回答を選択したものを下回る。全体的にみて、単純な線形関係にあるとはいえない。

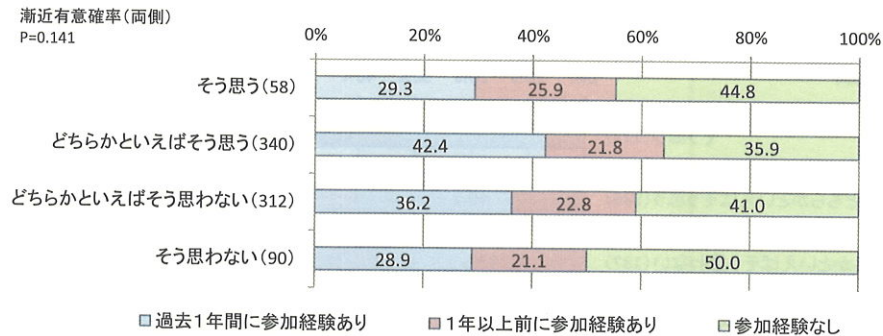


図13-1 ほとんどの人は信頼できる×ボランティア活動への参加経験

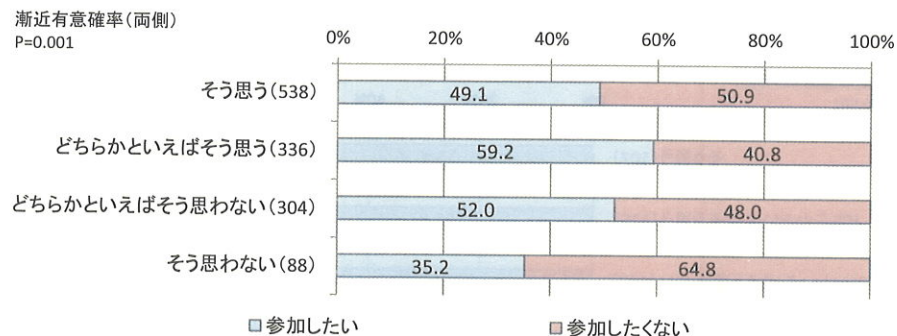


図13-2 ほとんどの人は信頼できる×ボランティア活動への参加の意向

4) 特定の人だけしか信頼できないか？

質問への回答と、ボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係をまとめたものが、図14-1、図14-2である。参加経験との間には5%水準で、参加の意向との間には1%水準で、有意な結びつきがみられる。

いずれの場合も、回答した選択肢が「そう思う」から「そう思わない」へ移行するにつれて、参加経験、参加希望を有するものが過半数になるといった線型的な関係が成立している。

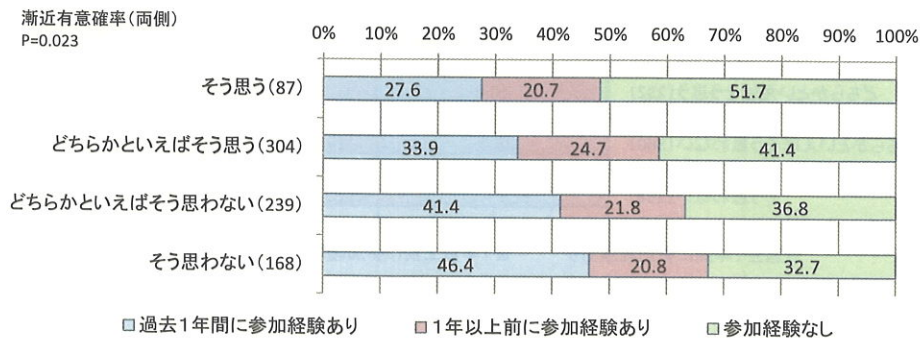


図14-1 特定の人だけしか信頼できない×ボランティア活動への参加経験

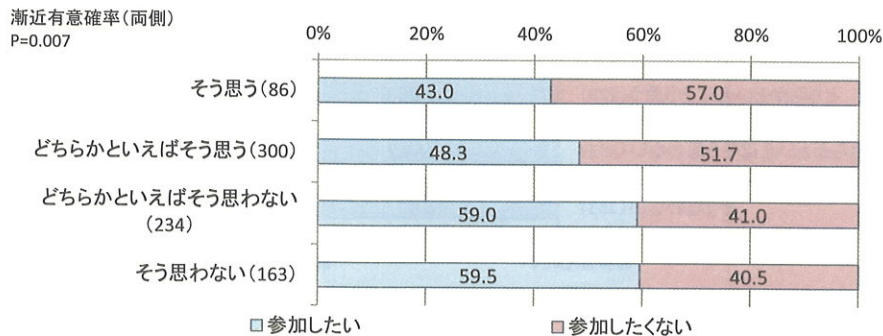


図14-2 特定の人だけしか信頼できない×ボランティア活動への参加の意向

5) ほとんどの人は他人を信頼しているか？

質問への回答と、ボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係をまとめたものが、図15-1、図15-2である。参加経験との結びつきに関しては10%水準での有意傾向が認められるが、参加の意向とは有意な結びつきは確認できない。参加経験との間の結びつきは、単純な線形関係ではない。

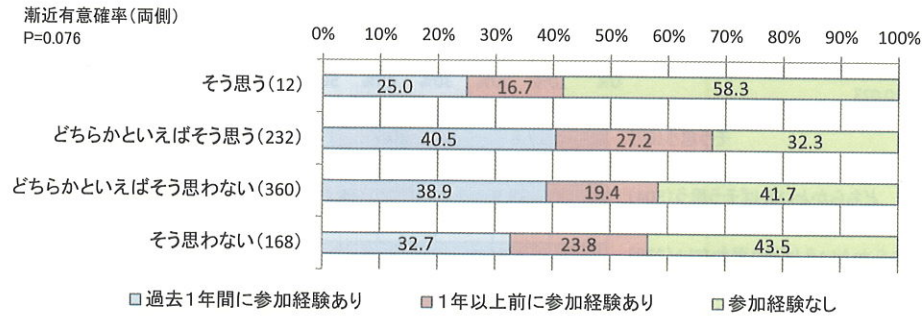


図15-1 ほとんどの人は他人を信頼している×ボランティア活動への参加経験

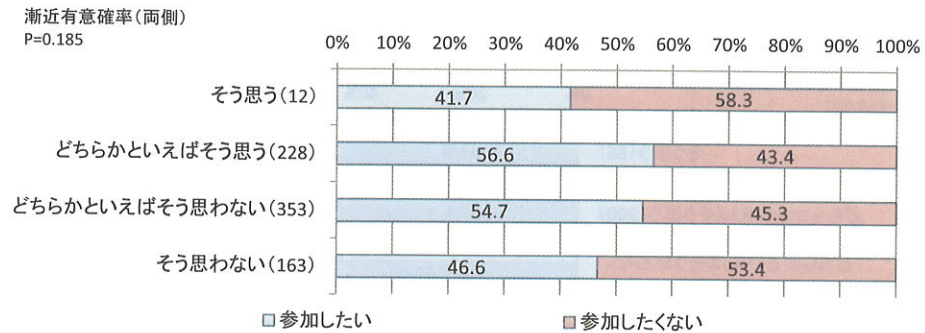


図15-2 ほとんどの人は他人を信頼している×ボランティア活動への参加の意向

6) ほとんどの人は基本的に善良で親切であるか？

質問への回答と、ボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係をまとめたものが、図16-1、図16-2である。参加経験との間には、統計的にみて有意な結びつきは確認できない。参加の意向に関しては5%水準で有意な結びつきがみられる。

参加の意向との結びつきに関して、「そう思う」と回答したものから、「そう思わない」と回答したものへと、質問内容に関して否定的な傾向が強まるにしたがって、参加を希望するものの割合が逓減していく線形的な関係が確認できる。

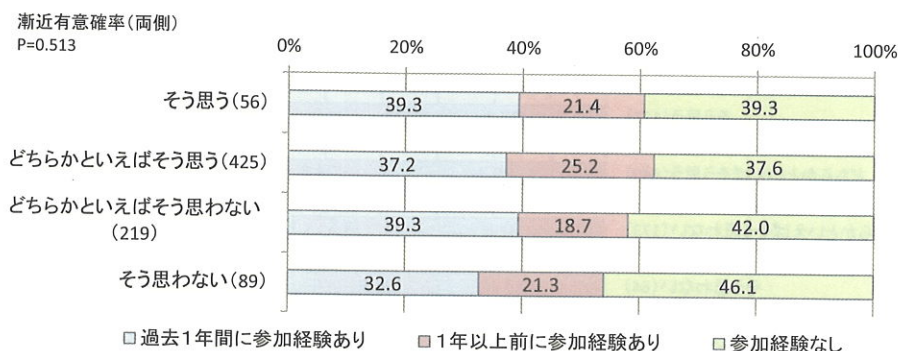


図16-1 ほとんどの人は基本的に善良で親切である×ボランティア活動への参加経験

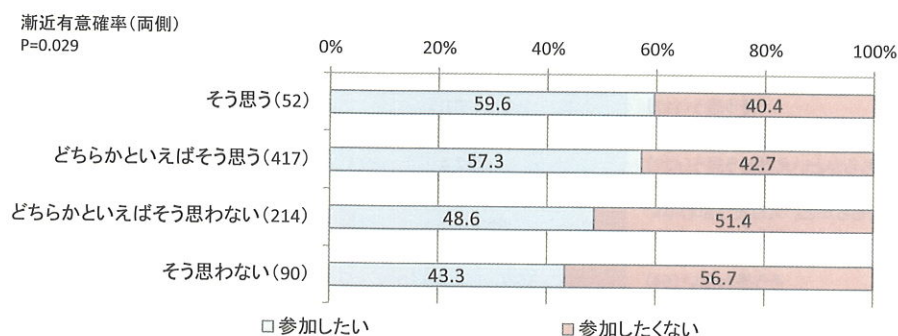


図16-2 ほとんどの人は基本的に善良で親切である×ボランティア活動への参加の意向

7) ほとんどの人は人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼するか？

質問への回答と、ボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係をまとめたものが、図17-1、図17-2である。参加経験との間には、統計的にみて有意な結びつきは確認できない。参加の意向に関しては1%水準で有意な結びつきがみとめられる。

参加の意向との結びつきに関して、「そう思う」と回答したものから、「そう思わない」と回答したものへと、質問内容に関して否定的な傾向が強まるにしたがって、参加を希望するものの割合が逓減していく線形的な関係が確認できる。

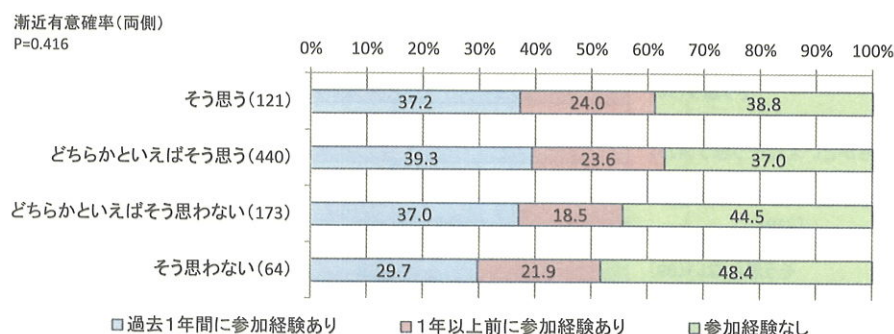


図17-1 ほとんどの人は人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する×ボランティア活動への参加経験

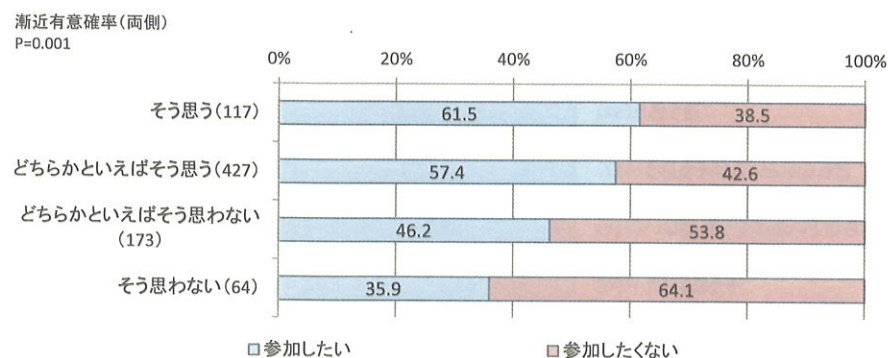


図17-2 ほとんどの人は人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する×ボランティア活動への参加の意向

(5) 他者に対する信頼に関する多変量分析

7つの質問項目と、ボランティア活動への参加経験、参加の意向の結びつきは一樣ではなく、明瞭に線形的な結びつきがみられる項目、結びつきはみられるが線形関係ではない項目、結びつきがみられない項目に別れる。こうした関係をまとめたものが表5である。1%水準、5%水準で有意な結びつきがみられたセルには、それぞれ青色と緑色で、10%水準で有意傾向が確認されたセルには、オレンジ色で、網掛けをし、線型的な関係がみられたセルには○印がしてある。

表5 信頼に関する7つの質問項目とボランティア活動への参加経験、参加の意向との関係

	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7
参加経験	○			○			
参加の意向	○			○		○	○

参加経験に比べて、参加の意向との間に、有意な結びつきや線形的な関係がみられる項目が多いことが分かる。

1) 因子分析

質問項目をより少数の要素に縮約するために因子分析をおこない、その結果をまとめたものが表6である。

表6 信頼に関する質問項目の因子分析結果

項 目	因子負荷量	
	因子1	因子2
	ローカルな他者への信頼	一般的他者への信頼
ご近所の方を信頼できる	0.826	-0.030
お住まいの地域の人たちを信頼できる	0.934	-0.055
ほとんどの人は信頼できる	0.342	0.459
ほとんどの人は他人を信頼している	-0.042	0.680
ほとんどの人は基本的に善良で親切である	-0.028	0.785
ほとんどの人は人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する	0.019	0.611
特定の人だけしか信頼できない	-0.276	-0.093
累積寄与率 (%)	44.300	62.279

注1) 因子抽出法：最尤法

注2) 回転法：プロマックス法

因子1は、「ご近所の方を信頼できる」、「お住まいの地域の人たちを信頼できる」の2項目と正の大きな相関を示し、いわゆる特定化信頼のなかで、地域の顔見知りへの信頼をあらわしていると解釈できるため、「ローカルな他者への信頼」と呼ぶことにする。

因子2は、「ほとんどの人は信頼できる」、「ほとんどの人は他人を信頼している」、「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」、「ほとんどの人は人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する」の4項目と正の大きな相関を示し、どこの誰かを特定できない不特定多数の他者への信頼をあらわしていると解釈できる。「一般的な他者への信頼」と呼ぶことにする。

「特定の人だけしか信頼できない」という項目は、いずれの因子とも負の相関を示す。これは、ローカルな他者も一般的な他者も、ともに信頼できないものにとって、家族や親戚、友人・知人といったより個別的な結びつきのある特定の人だけが信頼に値する他者であるためであると考えられる。

2) 相関関係の分析

一般的に、一般的信頼と特定化信頼との結びつきは、あまり大きくなく、一般的信頼は教育歴や経済的な格差といった外成的な要因によって強く規定されているといわれている。今回の調査では、就学年数の長さを尋ねている。

表7は、ローカルな他者への信頼、一般的な他者への信頼、就学年数の関係について、spearmanの順位相関係数を求めたものである。

表7 他者への信頼に関する因子と就学年数の相関関係

		第2因子 一般的な他者への信頼	就学年数
第1因子 ローカルな他者への信頼	相関係数	0.677	0.051
	有意確率（両側）	0.000	0.168
	度数	757	718
第2因子 一般的な他者への信頼	相関係数		0.115
	有意確率（両側）		0.002
	度数		718

就学年数と一般的な他者への信頼の間に1%水準で有意な相関が認められるものの相関係数は0.115であり、軽微な結びつきである。一般的な他者への信頼とローカルな他者への信頼との間にも、1%水準で有意な相関が認められ、相関係数0.677と非常に強い結びつきを示している。社会関係資本論で論じられてきた一般的な傾向とは、異なる結びつきが確認された。

社会関係資本に関する研究蓄積が進められてきた欧米諸国では、社会階層やエスニックグループによるセグリゲーション（棲み分け）が顕著であり、地域住民への信頼は一般的な他者へ

の信頼とは結びつきにくいと考えられる。これに対して、福井県は典型的な内からの混住化社会であり、さまざまな社会階層、学歴、職業の人々がモザイク状に入り混じって地域生活を送っている。こうした生活環境において、地域住民への信頼は他者一般に対する信頼を醸成する働きをもつと考えられる⁴⁾。

3) 因子分析の結果を用いたクラスター分析

2つの因子の得点を用いて、クラスター分析（Ward法）をおこない、回答者を2つのクラスターに区分した。クラスターごとに2因子の平均得点を算出し、偏差値についてまとめたものが図18である。ローカルな他者への信頼も一般的な他者への信頼も厚いグループ（クラスター1）と、どちらも薄いグループ（クラスター2）に分かれる。

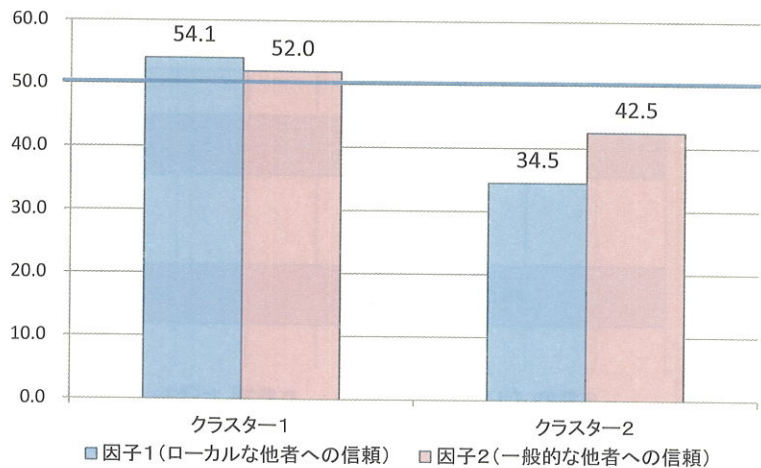


図18 クラスターごとの因子得点の偏差値

クラスターごとのボランティア活動へ参加経験と参加希望を比較したものが、それぞれ図19-1、図19-2である。いずれも5%水準で有意な結びつきが確認され、クラスター1（ローカルな他者への信頼および一般的な他者への信頼が厚いグループ）の方が、クラスター2（ローカルな他者への信頼および一般的な他者への信頼が薄いグループ）に比べて、過去の参加経験が豊富であり、今後の参加意欲も旺盛であることが分かる。社会関係資本の構成要素である他者への信頼が厚いものほど、ボランティア活動に積極的であることが確認された。

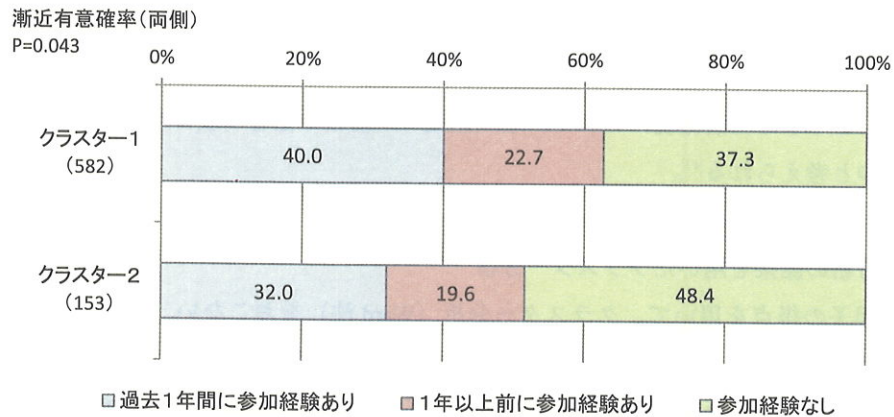


図19-1 クラスター分析（他者への信頼）×ボランティア活動の参加経験

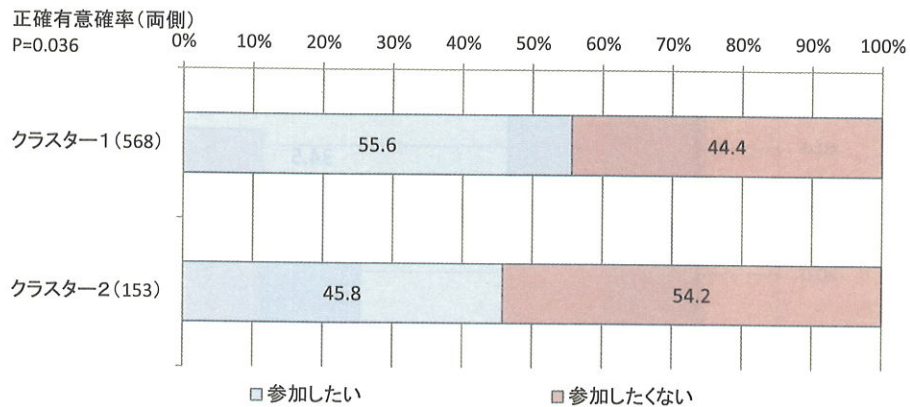


図19-2 クラスター分析（他者への信頼）×ボランティア活動の参加希望

（6）結論

最後に、社会関係資本を構成する要素間の相互関係とボランティア活動への参加にあたる影響の大きさについて概観し、まとめの考察をおこなう。

1) 4 因子間の結びつき

表8は、ネットワーク因子、(特定化) 互酬性因子、ローカルな他者に対する信頼因子、一般的な他者に対する信頼因子、表7でも確認した就学年数の間の関係 (spearman の順位相関係数) についてまとめたものである。1%水準で有意な相関が認められ、相関係数が0.5以上のセルには水色で、0.5以下のセルには緑色で網掛けしてある。

就学年数は、一般的な他者との信頼因子と1%水準で有意な相関を示すのみで、他の因子との間には有意な相関が確認できない。社会関係資本の構成要素であると考えられる4因子間に

は、すべて1%水準で有意な結びつきが確認できる。しかし、ネットワーク因子と特定化互酬性因子の間に0.753、ローカルな他者への信頼因子と一般的な他者への信頼因子の間に0.633、と非常に強い結びつきが確認できるのに対して、その他の因子間の結びつきは、0.180から0.272の範囲の弱い相関関係にとどまる。

具体的な人間関係の結びつきの強さを表現していると考えられる2つの因子、他者への信頼の程度という心理的な傾向性を表現していると考えられる2つの因子の間にはそれぞれ強い結びつきが存在している。一方で、具体的な人間関係の結びつきの強さと心理的な傾向性の間の結びつきは、それほど強くはないことが確認される。

表8 社会関係資本の構成要素および就学年数の相関関係

		特定化 互酬性因子	ローカルな 他者への信頼因子	一般的な 他者への信頼因子	就学年数
ネットワーク 因子	相関係数	0.753	0.239	0.180	0.059
	有意確率(両側)	0.000	0.000	0.000	0.118
	度数	743	625	625	705
特定化 互酬性因子	相関係数		0.272	0.212	0.047
	有意確率(両側)		0.000	0.000	0.212
	度数		625	625	705
ローカルな他者 への信頼因子	相関係数			0.677	0.051
	有意確率(両側)			0.000	0.168
	度数			757	718
一般的な他者 への信頼因子	相関係数				0.115
	有意確率(両側)				0.002
	度数				718

2) ボランティア活動参加との結びつきの強さ

ボランティア活動参加と人間関係の具体的な結びつきの強さを表現していると考えられるネットワーク因子、特定化互酬性因子とボランティア活動参加の間には、図10-1、図10-2で確認したように1%水準での結びつきがみられた。ボランティア活動参加と他者への信頼といった心理的な傾向性を表現していると考えられるローカルな他者への信頼因子、一般的な他者への信頼因子の間にも、図19-1、図19-2で確認したように5%水準での結びつきがみられた。こうした結びつきの強さを比較するために、ファイ係数ならびにCramerのv係数を算出したものが表9である。

表9 結びつきの強さの比較

	参加経験	参加の意向
具体的な人間関係の結びつきの強さにもとづいて分割されたクラスター	Cramer の ν 係数 0.264	Cramer の ν 係数 0.293
他者への信頼といった心理的な傾向性にもとづいて分割されたクラスター	Cramer の ν 係数 0.093	ファイ係数 0.081

ネットワーク因子や互酬性因子のような具体的な人間関係の結びつきの強さにもとづいて分割されたクラスターとの係数が、0.264、0.293と相対的に大きな数値を示すのに対して、他者への信頼といった心理的な傾向性にもとづいて分割されたクラスターとの係数は、0.093、0.081と小さな値にとどまる。

ボランティア活動への参加に関して、地域や近隣とのつながりのような具体的な人間関係のネットワークの方が、他者への信頼よりも、強い影響を及ぼしていることがうかがえる。

3) 因子分析の結果を用いたクラスター分析

4つの因子の得点を用いて、クラスター分析（Ward法）をおこない、回答者を4つのクラスターに区分した。クラスターごとに4因子の平均得点を算出し、偏差値についてまとめたものが図20である。4因子すべての得点が平均を上回るグループ（クラスター1）、ネットワーク因子と互酬性因子の得点が平均を上回り、信頼に関する2因子の得点が平均を下回るグループ（クラスター2）、ネットワーク因子と互酬性因子の得点が平均を下回り、信頼に関する2因子の得点が平均を上回るグループ（クラスター3）、4因子すべての得点が平均を下回るグループ（クラスター4）に分かれる。

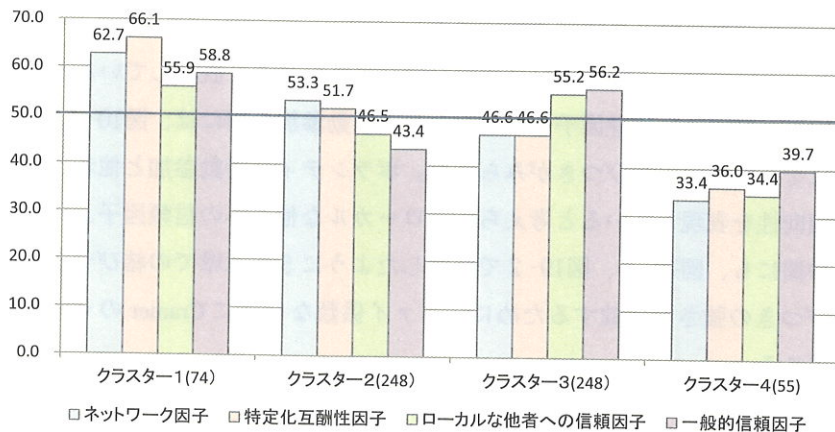


図20 クラスターごとの4因子得点の偏差値

クラスターごとのボランティア活動へ参加経験と参加希望を比較したものが、それぞれ図21-1、図21-2である。いずれも1%水準で有意な結びつきが確認され、クラスター1からクラスター4の順に、過去の参加経験が豊富であり、今後の参加意欲も旺盛である。クラスター2とクラスター3の比較からも、社会関係資本の構成要素のうち、具体的な人間関係の結びつきの強さにもとづくネットワーク因子や特定化互酬性因子の方が、心理的な傾向性の表現であるローカルな他者への信頼因子や一般的信頼因子よりも、ボランティア活動参加を強く規定していることが推察される。

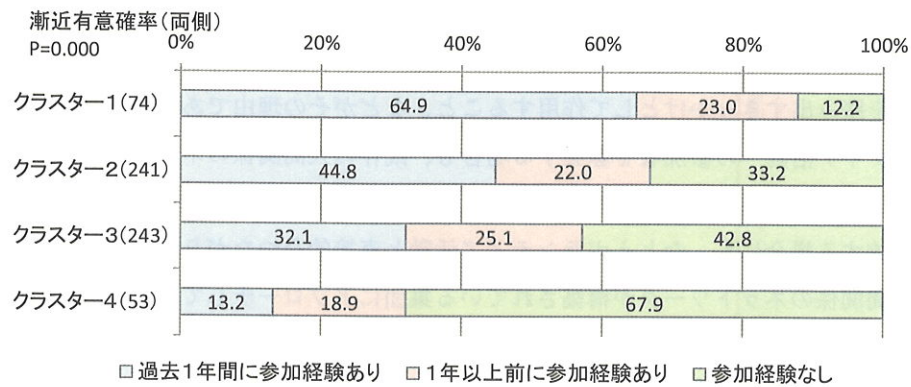


図21-1 クラスター分析 (4 因子) × ボランティア活動の参加経験

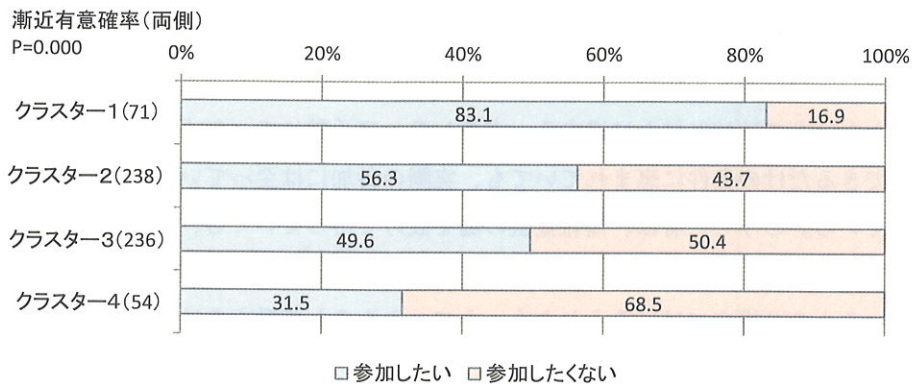


図21-2 クラスター分析 (4 因子) × ボランティア活動の参加の意向

4) まとめ

ボランティア活動への参加は、直接的な利害関係をもたない他者への援助や支援、公益の増大をもたらすため、社会関係資本論の文脈では一般的互酬性に分類される。社会関係資本を構成する要素の間には、強い正の結びつきが予想されるが、今回の調査でもそのことが裏付けられる結果となった。

社会関係資本の構成要素のうち、ボランティア活動参加と特に強い結びつきを示したのは、ネットワーク因子と特定化互酬性因子であった。1) 地域社会の人間関係に包摂されているものほど利己的な傾向が抑制されやすいこと、2) 人間関係のネットワークがボランティアに関する具体的、個別的な情報の流通回路として機能すること、3) すでにボランティア活動に参加している知り合いから、活動参加を進められることで、参加への心理的なハードルが下げられ、一步を踏み出すきっかけとして作用すること、などがその理由であると推察される。

ボランティア活動への参加者を募集する場合も、既存の人間関係のネットワークを活用することが効果的であることが示唆される。ボランティア活動に関する情報提供、講演、セミナー、などを実施する場合にも、たとえボランティア活動と直接的なつながりをもたないものであっても、人間関係のネットワークが構築されている集団にアプローチしていくことが有効ではないかと考えられる。

ボランティア活動への参加を阻害する主要な要因として、1) 関心そのものの欠如、2) 健康面での問題、時間的・経済的なゆとりのなさ、といった構造的な阻害要因、3) 一步を踏み出すきっかけがつかめない、といったものがあげられる。ボランティア活動への参加希望者の数を参加経験者の数が大きく下回るといったギャップは、きっかけの欠如によって説明されると思われる。ボランティア活動に参加してもよいと考えているもののうち、過去1年間に参加経験をもたないものは40%以上に達する。ボランティア活動にまったく興味が無いわけではなく、活動できるだけの条件に恵まれていても、実際の参加には至っていないものが、少なからず存在している。こうした層は、情報提供の場を設けて待っていても、自ら進んでそこまでやってくる可能性は高くないと予想される。参加を引き出すには、人間関係のネットワークに包摂されているものの場合には、そうしたネットワークを介して働きかけることが有効であると思われる。

謝辞

本稿で分析に使用したアンケート調査の実施、データの収集にあたり、平成24年度から25年度にかけて福井県立大学地域貢献研究の助成を受けた。本稿の取りまとめに関しても、平成28年度福井県立大学特別研究費〔C 枠〕の助成を得ている。調査研究を進めていく上で、福井県総合政策部政策推進課、福井県健康福祉部長寿福祉課生きがい支援グループ、福井県健康福祉

部地域福祉課地域健康福祉グループ、から適切なアドバイスをいただいた。アンケート調査の実施にあたっては、サンプリング作業に関して県内各市町村の関係部署に、回答に関して一般住民の皆様にご協力いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

注

- 1) 福井県立大学ボランティア研究会が平成25年度に実施したアンケート調査で採用した分析枠組みの詳細については、福井県立大学ボランティア研究会（2014）を参照。データの実証的な分析に基づく分析枠組みの形成過程については、塚本（2011）に記載がある。
- 2) ボランティア活動に関する調査・研究では、ボランティア活動の定義が問題になる。今回の調査では、ボランティア活動に関して、一般的に指摘されるミニマムの構成要素としての「公共性」、「自発性」、「非営利性」を前提した定義を採用した。調査票の冒頭部分において、「ボランティア活動」とは、自分の本来の仕事（家事や育児、介護、学業などを含む）とは別に、他人や社会のために、自分の時間や労力を、自発的に（なんらかの強制によるのではなく）、営利を目的とすることなく、提供する活動のことを指します」と定義を明示したうえで、回答を求めている。
- 3) 基本属性とボランティア活動参加の関係については、塚本・舟木・橋本・永井（2016a）を参照。
- 4) 混住化と社会関係資本の関係については、塚本・小林・酒井（2013）を参照。

参考文献

- Coleman,J.S., 1988 Social Capital in the Creation of Human Capital. American Journal of Sociology,94 : S95-S120,
（金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」、野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房,2006第6章）
- 福井県立大学ボランティア研究会【塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・小林明子】、2014、『アクティブシニアのボランティア活動参加に関する研究』福井県立大学地域貢献研究・平成24～25年度調査研究報告書
- Gouldner,A.W., 1960 The Norm of Reciprocity, American Sociological review,Vol,25,No2,
- 今井晴彦・園田紫乃・金子郁容、2010、『コミュニティのちから—“遠慮がち” ソーシャル・キャピタルの発見』慶應義塾大学出版会
- 稲葉陽二、2005、「ソーシャル・キャピタルの経済的合意—心の外部性とどう向き合うか」『計画行政』28（4）：17-22
- 稲葉陽二、2007、『ソーシャル・キャピタル「信頼の絆」で解く現代経済・社会の諸問題』生産性出版
- 稲葉陽二、2011、『ソーシャル・キャピタル入門 孤立から絆へ』中公新書
- 稲葉陽二、2014、「社会関係資本は毀損したか。—2013年全国調査と2003年全国調査からみた社会関係資本の変化」『政経研究』51(1):1-30.
- Mauss,M., 1950 Essai sur le don, Sociologie et anthropologie, précédé d'une introduction à l'œuvre de Marcel Mauss, par Cl. Lévi-Strauss, (吉田禎吾・江川純一訳『贈与論』ちくま学芸文庫, 2009)
- 内閣府経済社会総合研究所編、2005、『コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書』
- 内閣府国民生活局、2003、『ソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて—』国立印刷局
- 二宮哲雄・中藤康俊・橋本和幸編著、1985、『混住化社会とコミュニティ』御茶の水書房
- Putnam,R.D., 1993 Making Democracy work : Civic traditions in modern Italy. Princeton University Press, (河田潤一訳『哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造』NTT出版,2001)
- Putnam,R.D., 2000 Bowling alone : The collapse and revival of American community. New York : Simon &

- Schuster, (柴内康文訳『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房, 2006)
- 徳野貞雄、2002、「現代農山村の内部構造と混住化社会」、鈴木広監修、木下謙治・篠原隆弘・三浦典子編、
『地域社会学の現在』ミネルヴァ書房：217-238
- 塚本利幸、2011、「福井県における社会活動参加の現状と課題」『ふくい地域経済研究』13:43-60
- 塚本利幸、2012、「ボランティア活動参加とジェンダー」『日本ジェンダー研究』15:65-79
- 塚本利幸・小林明子・酒井美和、2013、「混住化地域の近隣関係における互酬性—福井市の事例から—」
『福井県立大学論集』41:13-38
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子、2016 a、「アクティブシニアのボランティア活動参加と基本
属性—福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から 1—」『福井県立大学論集』47:19-43
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子、2016 b、「アクティブシニアのボランティア活動の参加の様
態—福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から 2—」『福井県立大学論集』47:45-73
- Uslaner, M.E., 2002 The Moral Foundation of Trust. Cambridge University Press
- Warren, M.E., 2001 Democracy and Association. Princeton University Press